

# 琵琶湖だより

写真「田んぼの生きものシリーズII」  
ニホンアカガエル



## 地域の人たちと共に歩む博物館活動

### - 湖国もぐらの会の展示・交流活動 -

満々と水をたたえる琵琶湖。そのまわりには、ぐるりと1000メートルほどの高さの山々を取り囲んでいます。これらの山を作る岩石は、2億年より前に遠く離れた南の海域でできた石灰岩やチャートと呼ばれるものだったり、9000～7000万年前に地下深くにあったマグマが冷えて固まってできた花崗岩類などです。石灰岩の中には、太古の昔に海に生きていた生物が化石として残っていますし、花崗岩類ができるときに生じた隙間には、水晶やトパーズといった鉱物がみられます。

また、それらの山々と湖の間には丘陵地帯がありますが、そこには1700万年前の暖かい気候と内湾の環境の中で堆積した鮎河層群や、400～40万年前の古琵琶湖層群と呼ばれる地層などが見られます。これらの地層の中には、植物、貝、魚、ゾウやシカ、さらにはクジラといった様々な化石が入っています。

滋賀県では、このような土地柄からか、琵琶湖博物館ができる前から化石や鉱物の採集を楽しみ、地域の子供たちにその面白さを伝える活動をしていた個人やグループがいくつもありました。これらの活動は、琵琶湖博物館ができてからは、博物館を活用した活動へと少しずつ変わっていき、ついには「湖国もぐらの会」が結成されるまでになりました。

その活動のひとつとして、これまでに展示会を3回行ってきました。その最初は、2001年に「湖国の大地に夢を掘る」と題して、琵琶湖博物館の企画展示室を使って行われました。この時の鉱物や化石の資料を展示したのは、従来から琵琶湖の周辺で地学資料を採集している、20名ほどの大人たちだけでした。しかし、回を重ねるごとに展示参加者も増加し、第3回目では展示参加者は80名を超えるほどになり、子どもたちやその保護者、高校の地学クラブなども参加し、輪は随分と広がりました。

こうした企画展示室を使った大規模な展示だけでなく、常設展示のひとつ「琵琶湖のおいたち」展示室に作られた「地域の人々による展示コーナー」でも、入れ替わりで展示を担っています。休日には、そのコーナーに展示をしている人が化石や鉱物の実物を持参して、ときどき来館者と交流する姿も見ることができます。



写真1 湖国もぐらの会のマスコット

そのほか、博物館が主催している夏休み自由研究講座や、化石の観察会などの説明役として活動したりもしています。また、最近では、地学資料の保全活動にも力を入れていて、精力的に琵琶湖周辺の鉱物や化石を集めていた方々がお亡くなりになった時に、その大切な資料があちこちに分散してしまわないよう、積極的に琵琶湖博物館への収蔵を働きかけています。このような資料は、博物館で収蔵保管し、次の世代に伝えるとともに展示や交流活動に活用されます。

さて、こうした中で4月1日から6月3日までの間、琵琶湖博物館の企画展示室で、第4回目となるギャラリー展示「鉱物・化石展2012 湖国の大地に夢を掘るIV」(入場無料)が開催されることになりました。ここでは、普段みることのできない個人所有の県内産鉱物化石がたくさん見られます。是非、皆様もご来場いただき、夢を掘る人々の思いを感じ、自然の素晴らしさを味わってみてはいかがでしょうか。

(上席総括学芸員 高橋啓一)



写真2 展示会での来館者との交流のようす



写真3 常設展示「地域の人々による展示コーナー」での来館者との交流のようす



写真4 化石の観察会で説明をする湖国もぐらの会の会員

# 琵琶湖博物館 うおの会

琵琶湖博物館うおの会は、魚を愛し、魚とを楽しみ、魚とその生息環境を将来に残すため、琵琶湖流域の魚とその生息環境の現状を調査しその姿を証拠として記録することを目的に、琵琶湖博物館のはしかけ制度のもと発足したグループです。

滋賀県には、母なる湖の琵琶湖はもちろん、琵琶湖に流れ込む河川や水路、灌漑用のため池などさまざまな水環境があり、それぞれに順応した多くの種類の魚たちがすんでいます。当会では、こうした魚たちの分布の様子を、周辺の環境と併せて調査し、時間の推移とともに変化する様子を記録しています。また、調査に必要な基礎的知識をメンバーが共有するための研修会なども開催し、日々研鑽に励んでいます。

調査活動の成果は、琵琶湖博物館研究調査報告「みんなで楽しんだうおの会—身近な環境の魚たち—」や、「魚つかみを楽しむ魚と人の新しいかかわり方」などの書籍にまとめられ、滋賀県のレッドデータブックにも参考資料として活用されるなど、魚たちの保全に役立っています。

このほか、昨年7月2日に開催された「あさ、ひる、ばん博物館を楽しもう！」のはしかけオープンハウスに参加し、多くの子どもたちに投網の投げ方を体験してもらいました。また、7月23日には、琵琶湖博物館と共催で観察会を開催し、守山市内の河川で参加者と一緒に魚の採集をしました。観察会では、身近な川にすんでいる魚たちを紹介し、魚をつかむときのルールや、楽しい魚つかみも一つ間違えると危ないことも知ってもらいました。こうした活動を通じて魚つかみの楽しさを知ってもらい、魚や自然を大切にする気持ちをもったひとが、一人でも多く育つことを期待しています。

(総括学芸員 松田征也)



写真  
① 守山市内の川での観察会  
② 水草についての研修会  
③ はしかけオープンハウスでの投網教室



## 【資料裏話 その4】 湖底の泥で作った燃料

湖底にたまって泥状になった水草などを団子状に固めたものです。湖にほど近い近江八幡の地域ではこれをスクモと呼び、手作りして煮炊きに使いました。里山で採れる柴・薪や、電気・ガス・灯油などが充分に手に入らない時に、身近にあるものを燃料にしていたのです。民具資料は、身近な自然をうまく活かす人々の知恵と工夫を伝えてくれます。特に消耗品が博物館に収蔵されるのは珍しく、この団子は貴重な逸品です。

(主任学芸員 中藤容子)

### 編集後記

この4月から、ギャラリー展示で鮎物・化石展が開催されます。滋賀の山で発見された鮎物も展示されるそうです。一方、水辺に生息する鳥で、その美しい外見から「溪流の宝石」と呼ばれているカワセミ。「溪流の...」と呼ばれるのですが、実は博物館の生態観察池にも生息しています。琵琶湖岸でも姿を見かけます。すこし目を凝らせば、見えてくる素敵なものたち。次の休日は、宝物探しに自然の中に行きませんか。(てら)

### ◆巻頭写真の説明

ニホンアカガエルは本州のカエルでは一番早い2月頃産卵期を迎え、きれいな朱色に変わります。冬眠から一番に目を覚まし、産卵場所となる水の溜まった田んぼを探しに出かけます。産卵期に水のある水田は重要な産卵場所です。卵から子ガエルに成長する6月頃まで水が必要なので、産卵場所選びは大事な仕事です。そして、無事産卵を終えた母ガエルはもう一度、春眠という眠りにつきます。

### 🕒 鳥の目 魚の目 クイズ 🕒

「もう産みましたから、そろそろ…」

Q 3月頃、いち早く産卵を終わせたニホンアカガエルの母親。この後、どんな行動をするでしょうか？

- ① 冬眠明けのご飯探しの旅へ出かける
- ② 卵が心配なので、そばで見守り続ける
- ③ まだ寒いので、もう一度眠る

答えは、紙面のどこかにあります。